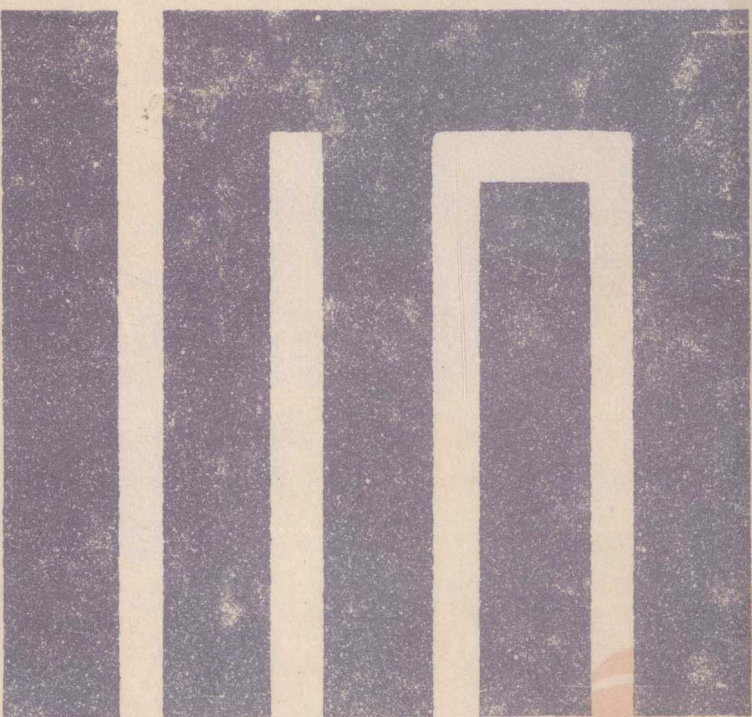




讀

論

藏

庫

江苏工业学院图书馆
书章



鏡花全集 卷五 第五回配本（全二十九）

昭和十五年三月三十日 第一刷發行
昭和四十九年三月四日 第二刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

無憂樹	(明治三十九年六月)……………	一
お辨當三人前	(明治三十九年七月)……………	一九
春晝	(明治三十九年十一月)……………	二五
春晝後刻	(明治三十九年十二月)……………	二七
婦系圖前篇	(明治四十年一月)……………	三五
婦系圖後篇	(明治四十年三月)……………	五三

無
憂
樹

花鳥たがね

玉の臺

田原平兵衛

鬼門

扇屋、ひな唄

辻占

扇折

矢羽の簪、むし眼鏡

花一輪

惑星

花園、宮殿

ひとり寐

投松明

刑事部屋

まぼろし

東條判官

しるしの松

白き炎、

月裏法廷

其樹安住。上下正等。枝葉垂布。半綠半青。翠紫相暉。如孔雀頂。又甚柔輭。如迦鄰提衣。其花香妙。聞者歡喜。摩耶夫人。安庠漸次。至彼樹下。是時彼樹。以於菩薩威德力故。枝自然曲。柔輭低垂。摩耶夫人。卽舉右手。猶如空中出妙色虹。

花鳥たがね

一

砧打つや、孫六屋敷、志津屋敷、美濃路にかゝりて、と前書した、それは昔の刀鍛冶、これは伊勢なる打金匠。

御縁頭目貫など、武家の註文引きも切らず。門に鳥毛をたてさせて、一頃きこえた細工の上手。白銀師兼長、と軒に草書の金看板、名は古市に榮えたが、今の時世のかはりやう、宇治橋の袂で賣る、小兒衆の土産にする、弓も劍もなくなつて、鐵砲に彫る蝶もなく、喇叭に飾る牡丹もなければ、毛彫、深彫、象嵌、魚子、花の朧の石目の數より、手練の塹は多けれど、刃先に霜の冴ゆるのみ。兎の毛の尖の露を認る、老の瞳は曇らぬが、顰がちの眉白き兼長は年紀五十一。

七十路ばかりの母者人と、二十になる總領と、間置いて、十三の、法性寺のいがぐり入道、今の腕白太政大臣、次郎助と名も稻荷のやうな、初午の午の年、ひん／＼飛んだ惡戲小僧と、三人

口を一たがね、細工盤の根太ゆがめば脂柱太しく立てても、眞鍮の迷子札、いたづらな小判では、支へかねたる氣のおとろへ、あはれ鐵槌の腕は鳴つても、中りやんした、媚かしい楊弓程は世に聞えず、韃の煤に燻ぶつた、店の格子の薄暗い、霜月の二十五日、日暮前の事である。表は内宮に一筋道、旅帽子の鷗が浮いて、赤毛布も、もみぢの錦、一年三百六十日、流るゝ水かと絶間のない、名所の川とあやまたれて、いつも諸國の人道。

球ころがしの門店から、折曲つた此の横町。行き抜けた田圃を見て、遠方の森の中に、中學校の屋根の夕日、薔に霜は未だ置かぬが、枯枝の中の硝子窓、鳥の翼に隠れつべう、三日月寒き風情あり。仕舞家續きの片側町、曲つたばかりで靜として、遠くから散つて來た、餘波の落葉ちよろゝと、古市の其の街道へ、颯のやうな顔を出して、賑かさに慌てて引込み、がさゝと小戻りして、小溝のふちの薄暗がりへ、搔縮むだ物寂しさ。

角家なる、其球ころがしの店看板、やくしやの夕霧の似顔で出來た、活けるが如き山姥は、熊と金時を誘ひ連れ、夜中頃には山めぐり、此の横町を巡るであらう。

隠れた落葉も氣勢する、兼長が軒の下、格子前にぞむで、白銀師の看板に、洗ひ髪をしたゝる緑、梅の薫の馥郁たる、藝妓島田の髻を寄せ、領脚白き横顔に、口の苔の未開紅。俤に立つ柳の眉を、蜘蛛の絲にかけて、優しく覗いた女がある。

髪かみの濃こく、色いろの白しろいに、くつきり黒緇くろじゆす子の襟えりかけた、銀鼠ぎんねずみと赤あかを縦縞たてじまの、紺地こんぢ絲織いとおりの半纏はんてんぎ着たが、瘡やせぎすな丈立ただだちよく、淺黄あさぎ甲斐かひ絹きうの裏うら慎ちかましう、袖そでを衣紋えもんに引合ひきあはせた、衣服きふつは一寸々ちよいく着のお召縮緬めしちりめん、古代紫こだいむらさきに白しろと青あをの太白たいはくで菊きくの縫ぬいある半襟はんえりして、雪ゆきの膚はだに艶なまめかしい、緋縮緬ひぢりめんの蹴出けだし袴はかま。

わきあけに引締ひきしめつつ、お納戸なんど地に、白しろの手綱染たづなぞめの縮緬ぢりめんと、黒緇くろじゆす子を打合うちあはせの帶おび、きちんとして、藤紫ふぢむらさきの無地むぢの前垂まへだれ黄昏たそがれかゝる由縁ゆかりの色いろ、聲こゑもかけずに音信おとづれしが。

店格子みせがうしへ横よこづけの、槻けやきの角かくの細工さいく盤ばんと、長火鉢ながひばちで、縦たてに長く、八疊やふの片隅かたすみを座ざに仕切しきりつたは仕事場しごとばで、薄汚うすよごれた蒲團ふとんの上に、襷つぎはぎの膝ひざかけの、こはばつたのを疊たたんだまゝ、細工さいく人の姿すがたは見えぬ。

二

背後うしろに積つんだ道具だうぐ簞笥だんす、鐵てつの壁かべの如ごとく、城しろの石垣いしがきにも較くらぶべく、犇々ひしと小口こぐちの揃そろつた上に、御お神酒みき徳利とくりの口白くしろう、燈明とうみやうの火ひの新あたらしく、點ついたばかりの神棚かみだなは、學問がくもんする悻せがわの爲ためにも、父爺おやぢが信しん心の天神てんじん様さま。なるほど今日けふは二十五にじふご日にち。

然さういへば祭まつりか知らん、火鉢ひばちの板いたに銚子てうしが一本ほん、八疊やふの中なかほどに皿小鉢さらこぼちの體ていが見え、丸盆まるぼんが据すゑてあり。鐵瓶てつびんはチン／＼いつて、臺所だいどころにカタコトと立働たちばたらく人氣勢ひとけはひ、店みせには誰たれの姿すがたもなし。

未だ暮れ果てねば燈明も四邊を照らさず、四隅暗き折からなり、明い所を急いで来て、急に戸外から見る所爲か、と猶身を寄せて透かして見た、美人の此の姿、街道通る旅人には、宿の名の藤とや見えむ、小笠片手に、荷を振分けに、笠の廂を仰向けなどして、出女ならばと思ふやう、此の横町を見込んで、立淀みつとつかはと脚絆の黒い夕烏、相の山へや急ぐらし。

格子に軽く手を當てて、

「をびさん、」

と呼びかけたが、白やかな指で又其の格子を弾きながら、

「お留守ですか。」

すらりと立直つて、やゝ調子高に、

「今日は、今日は、」

どしん、天井を打抜くばかり、あわたしい物音して、戸棚の上から眞黒に疊へ飛んだものが

ある。

「あれ、……と吃驚。

知らずや、次郎助。

取附き正面の襖一間、一杯に、古い書割のやうになつて、柱とともに動かしたことの無い、置き

戸棚の上にちよこなんと、達磨を極めてござつたわ。

父爺は留守なり、祖母さんは臺所で着ごしらへ、暗まぎれに、豫ねて在所を狙つて置く。其戸棚の物蔭から、きよろゝ眼で捜し出した、黄金造を註文の、主は維新で退轉して、屑けさきも分らぬのを、主人が律義に藏つてある、蠟鞘鮫つかの無銘の一刀。兵兒帯にぐいと極めて、人なき店を一人天下。足をぶらりと引跨いだ、件の棚に乗り上り、床几にかゝつた氣がまへで、八方を睨めながら、肩胛を張つて構へた折から。

從姉と知つても年紀が違つて、遊び對手にはならない女。這奴？化粧のものござんなれ、本多平八郎忠勝これにあり、退治てくれう、眼の配り。棚から唐突の大達磨に、舞ひやまぬ埃の中を、構はず目を圓くして熟と見ながら、まくり手の居合腰、件の無銘に反を打つて、ふき出しさうな笑を耐へ、苦り切つた、澁い面、じりりと詰めて來て、細工盤に肩擦るばかり、體を伸ばして踏張つた、仰山な身の構へ。

丸顔の顎をしやくつて、

「もゝんがあ！」と一つ怒鳴る。

格子の外で身を躲した。此方は半面の笑美しく、

「否ねえ、次郎さん、まあ、」

「や、驚いてら、妖物。」

「あら、誰だつて吃驚するわ。だしぬけに天井から飛下りるんだもの、次郎さんの方が、餘程おばけよ。」

「う、ん、天井ぢやない。山の中に行暮れて、辻堂に居た所だ、僕は武者修行の劍術つかひだ!」
 といつて、小さく突立ち、

「夜が深々と更けて來て、風が颯と鳴り出して、谷川の流がざあ〜。物凄くなつた所へ、カラコロカラコロ、遠くから楚音だ。そら、來やがつたと待つてると、眞紅な襦袢をちら〜と見せやがつて、格子から雪のやうな眞白な顔を出して、可愛らしい造り聲で、伯父さんもないものだ。やい、兄さんを見に來た癖に、」

と眞向から斬つてかゝる。

三

爾時はらりと紅一葉、
 瞼を竊と格子の蔭に、伏目ながら瞳を流して、美人は莞爾と、
 「知りませんよ、一寸、何處でそんなことを聞いて來たの。」

「誰に、」

とつと身を寄せて、

「誰に聞いたつて？　丁と、學校のボオルドに書いてあるんだ。」

「中學校の？」

「う、む、僕のさ。兄さんは最う此の秋から、學校へは行きやしない。」

聞くと物思ふ間が一寸途切れた。

「何うして、行かないの。」

「だつて卒業しちゃつたぢやないか。」

「まあ、」

嬉しさうな面色しつつ、

「然う。私は些とも知らなかつた。」

と、もの足りなさうな風情である。

次郎助は高慢に、

「知れた事でございます。誰が、卒業證書を持つて、藝妓屋へなんか届けに行くもんか。えゝ、」

と斜めに臂を張る。

女は緋るやうに手を格子の、玉を刻んだ拳の下に前髪を俯向けた。

おくれ毛に風が添ひ、薄ら寒さうに肩を細うして黙つたが、顔を上げて田圃の空、星や迎ふる、目を外らして、

「澤山、そんな、邪険なことを然うお言ひなさいよ。どうせ藝者屋の妖物だから、私は最う歸るわ。」

と袖をあはせて對方を向く。帶の結び目斜つけに、風に殺がれた柳腰。半纏の胸狭く、寂しさうな後姿。

尾花の中にあらねども、あねめく、歸るなぞと人を威して、今に尻尾を出さうまでよ、と片頬笑して足許を狙つて居たが、眞個に行きさうな棲はづれ、吾妻下駄が、からりと返る。

次郎助敗北、格子戸で額を叩いて、

「あ、不可いよく。歸つちや不可いよ、姉さん。」とあはれな聲なり。

聞かないふりで曲つて立つ、末黒野の女郎花。

「遊んでおいでな、可い所へ來たんぢやないか。よう、おい、姉さんてば、」と勇士が柄にかくる手を、格子の外へ二の腕まで、木登りしさうな引留め方。

引戻されて振向いた、女は、次郎助の其の體を、思はず熟と瞻つたが、鼻筋の通つた眉の長い、清しい目にほろりとして、

「あれ、およしなさいよ、縁起でもない、男だつて、そんな形を、爲るものではありません。

藝者屋だと言はれたつて、ばけものだと言はれたつて、あの、慥うやつてね、隙を見て抜け出して來たんですもの。歸らなければならぬ時の來るまでは、突出されたつて歸りやしませんわ。」

「占たな。へゝ、」

とずり下つて、しかつめらしく頭を掻き、

「だつて、歸らうとするんだもの、腹立ち姉えツちやありやしない。」

「否、向うの森に、お月様が見えたから、吃驚して、私、見たんだよ。どうして急に夜になつたらうと思つてね、まだ、あれ、田圃が薄赤い、夕映ね。」

と向直り、

「厭だ、御覽なさいな、通りの方にはちら／＼燈が點いててよ。まあ、まだ森の學校も、はつきりに見えるのに、今日は夜も晝も一緒かねえ。」

「あんなことを言つて居ら。内にばかり引込んで居るから分らないんだ。此頃はね、いつでも晝間ツから月が出て居ます。當然な事を言つて居ら。」

「然う、だつて、きら／＼していらつしやるのよ、見えて、次郎さん。」

「此處からぢや見えやしないや。」

「御覽、見えないでせう。内にはつまり引込んでおいでだからだわ。」
謂ひ得て嬉しさうに莞爾した。中春なのが、あどけない。

玉の臺

四

次郎助は負けん氣の、躍起となつて、

「當然だ、當然だ、だつて當然ぢやないか。」

と獨りで疊みかけて忙しくいふのを、聞流して、わざと落着いたものの言ひやう、

「でも、兄さんの許からは見えませうねえ。」

うしろ様に一足すさつて、再び目を遣る棟の夕月。

表は廂に掛けた菜の、青かつしさまも見えず、太くからびて黄みながら、暗く片時雨する風情。
二階家わびしく古びたる、君が住居は裏の窓。月影も嚙ぞ文机に、と玉の臺を屋根越に、雲を隔
つる心かな。次郎助笑つて、